

[世界人類が平和でありますように] 2

藤井 貞和

(Nのノート)

(N)「10月21日、国学館大学——仮名——で、夕方からイザイホーの記録の上映があるというので、観にゆくと、大野久差(ひさし)——同——も来ている。さ来月には、久高島のイザイホー(祭り)が行われるので、わたしは久差のほかに、あと二人、古代研究会のメンバーをさそい、東京から訪れる予定だ。13年前の記録は、予習として恰好の映画だから、どうしても観ておかなければならなかった。100名近く来ていて、教室がいっぱい。かれらの多くもまた12月13日には久高島へ向かうのだろうか。そう思うとすこし行きたい気持ちがしてくる。イザイホーには行かないはずの——とかれ自身がそう言う——Fも、この映画会にすがたを見せていて、ちょっとわたしのなかで、ざわつく思いがする。13年後の1990年には、イザイホーが、もうおこなわれなくなるかもしれない、とささやかれる今回だ。ほかにも理由があるにせよ、2カ月もまえから、行かないよ、と宣言するようなやり方は、すこし周囲をとまどわせるみたいだ。いやいや、そんなことを言っちゃいけないな。かれだってどんなにか行きたいだろう。Fは寺子屋教室——かれらは《寺小屋》と書く——が、えらくいそがしいと、こ

ないだもぼやいていた、でもけっこうたのしそうだ。わたしは琉読会というのを、Fらと一緒にやってきて、久差もその仲間で、『南島歌謡大成』(全5巻)をずっと読みつづけて、半分を越えたところだ。

久差とのつきあいは、新城(あらぐすく)島でずいぶんまえに会って以来、沖縄ではもちろんのこと、東京でもよく会うようになった。専攻が植物民族学という、われわれにとってはめずらしい方面のつきあいだ、と言えは言える。以前には植物民俗学というのが久差の書き方だった。このごろ、植物民族学と書くようになってきたのは、ethnobotanyの訳語だという。久差のあの無類のやさしさと、研究熱心、というよりだれもがゆれに認める一途な探求心とには、われわれを引きつけてやまないものがある。専門を越えて、急速に親しくなっていく。久高島行きは、わたしがさそうまでもなく、かれが希望してきたところで、わたしたちは東京を発ち、13日には知念海洋レジャーセンターより、快速船で久高島徳仁港へ。琉球大学のY先生、S氏に合流して、数日の滞在がはじまる。Y先生は西銘老宅へつれていってくれる。すこしだけ、久差の遺した記録から、引用してみよう。——「遺した」という字を使わなければなら

いのが悔しいことだが。

《(1978年12月13日)

I氏らがいらっしゃる。

Y先生の案内で島内へ。

ウドゥンミヤーでは小屋の準備がすでに終わろうとしていた。イザイヤーはクバとススキとで作られていた。

神アシャギも同様。

イザイヤー、神アシャギを作るまえにノロがお祈りをしたという。

宮里さん、幸地さん、パルバースさん、石垣さん、上江州さんらに会う。

パナリで会った女子学生にも会う (!)》

と、第1日目の記事にはある。うえのパナリ(離れ)とは、離島、つまり新城島のことだ。久差の修士論文の題名は『八重山群島新城島における植物民族学的研究』といって、その調査、執筆のために、1976年12月～77年2月、77年7月～8月、同年11月～12月と、久差は3回にわたり八重山の離れ、新城島に滞在する。その修士論文は1978年2月に提出されて、博士課程に進学する。新城島の上地で、久差が豊年祭を見学したのは、1978年の夏だったようで、そのとき《女子学生》に会ったということだろう。悲しいことに、9月には、植物民族学を指導したK先生が亡くなって、かれの落胆は大きかった。ようやく立ちなおり、活動を再開しようと決意した、その出発が今回の久高島、そして奄美への、調査という旅行だった。

久高島のイザイホーの第2日目について、

《(12月14日)

朝から雨。

部落内を歩きまわる。

ハナさん宅で朝の食事。

9時すぎ、3人のナンチュが洗面器を持ってイザイガーの方へ歩いていく。

その時、フィルムを回しているカメラマンの相棒が、われわれに《どけ。》という合図を送っている。

ウドゥンミヤーでは、カメラマンたちがはしごをかけてフクギの枝を切っている。カメラマンたちのごうまんさには腹が立つ。》と見える。

実際、島へは何百人かのカメラマンが押しかけて、かれら同士のあそびもあり、やりきれない思いをさせられた。久差はそれらのことをふくめて、腹が立つ、と言う。フクギの枝を切ってよいものか、常識で考えてもカメラマンの態度はゆるせないうえに、植物民族学の久差として、思いが複雑だったはずだ。無類のやさしさ、とさきに述べたように、めったに怒りをあらわさない久差だ。怒るときにしろ、わたしからみればえらく素朴な、感性的な反撥で何かにいきどおる、という程度で、だいたいは一過性のものだ。

その久差が、わりあいはっきりと怒りを、あいてにぶつけるという感じで、あらわしたのだ。それは2日目だったか、3日目だったか、あとからやってきて、われわれの同宿者となった、

少数民族の研究をしているという某氏と、はなす機会があつて、その研究者はこう言った。

——かれらは（と、そのひとは少数民族の名称を挙げた——）低い生活をしているから、不幸なのです。したがってわれわれは、かれら少数民族に接することで、かれらを高めてあげなければならない。ええ、それが研究調査する者の態度なのです。

と。

この言を聞いたとき、久差はガバツと起き上がり、身を乗りだし、その研究者に食ってかかった。

——高めてやるとはどういうことですか。何ごとです、あなたの考えは、いったい。高い低いをどのようにして決めるのですか。

ほとんど意味不明というぐらい、久差の語気はあらく、怒っていた。周囲のわれわれがおどろいたほどで、めったにそんなことをしないわたしも、とりなす感じで、問題を一般化しなければならなかった。（その一瞬、イザイホーに來なかつたFのことをわたしは思いおこしていた。この場面で、もしFがいたなら、——たとえばわたしがFなら、その研究者を殴りたおしてしまふかもしれない、と思えてきて、Fがイザイホーに行きたくない、と言った理由が、不意にわかるような気がした。——瞬でしかなかつたけれど。）

ここには久差の学問をささえる、感性があらわれていたように思う。自分のさまざまな思いに対する、あきらめと、そのうえに立った、人

間へ接してゆく、姿勢、それはやさしさとしてあつた。久差は他人にもさまざまな思いがあることを知っていた。そして人間の幸福とはその孤独から脱することだと考えていた。だから、人間の心の問題を抜きにして、人間の高低を語る者はゆるせなかつた。特に民俗の調査研究者がそのような態度で調査にあたることをゆるせなかつた。それは久差自身が調査対象に対して、外がわの人間でしかないことをつねに意識しつつ、調査活動をつづけていたからだろう。

イザイホーが終わつて、久高島の青年たちが島外から訪れた者たちに配る、アンケートに久差は、

《じーっとイザイホーを見ていると、その世界に引き込まれてしまいそうです。しかし私は最後のカチャーシーでの島民の歓喜、あれがイザイホーではなかつたかと感じられます。錯覚かも知れませんが。》

久高島が久高島として繁榮し、イザイホーが13年ののちにも見られることを、一旅行者として願っております。

と書いた。イザイホーの祭事自体でなく、祭の終わりに饗宴としておこなわれるカチャーシーに、イザイホーを感じるとは。研究者の態度でこれはない。なぜならば、カチャーシーはさまざまな祭にあり、それはイザイホーであろうとなかろうと、大差がないからだ。久差はイザイホーという、13年に一度の特殊な祭の本質を、祭のたびごとにおこなわれるカチャーシーにみた。それは研究者として異常だ。しかしここに

は祭を研究対象としてばかりでなく、部落の人びとにとってどういう意味をもっているかをみようとする、ごく素朴な感性がある。しかも久差は自分を《一旅行者》として位置づけてみる。つまり自分は久高島に対し、たんにイザイホーを覬に来た、島の生活とはなんのかかわりもない人間にすぎないという意識だ。島に自分がなにかをあたえるということはない。むしろ島の生活を乱すだけの、ほんの通りすがりの人間にすぎない。これは沖縄を愛し、沖縄の人びとも愛された男のことばであると思えない。久差は他国者(よそもの)の意識をもっていたのだ。これもごく素朴な感性にすぎないといえる。つまり久差の仕事にそのような感性が高度に思想化されてあらわれるのを、われわれは待つことができなかった。」

(女子学生の感想)

「心のかおりを新城島に——豊年祭で

橋元キヨコ

(寺小屋教室《まつりを考える会員》)

そもそも、アカマター・クロマターというのは、頭から足もとまで、エビズル(ヤマブドウ)の葉でつつみ、頭上にクロツグ(マーニー)の葉を一本立てている、こういう容貌だと説明すると、ちょっとした鬼のイメージになるけれども、じつは神様なのです。実際に人間のまえに出現する神様です。

知り合った、植物民族学の大学院生が、おしえてくれました。それによると、エビズルはミーカニブルと言います。ミーは雌のことです。

その大学院生、大野久差さんの修士論文は、植物のなまえにミーとビヒ(雄)とがつけられていることについて、いろいろ調べたのだそうです。たとえば、エビズルがミーカニブルであるのに対して、ビヒカニブルというと、テリハノブドウという植物です。ミーカニブルは、黒熟した実がおいしく、しかもこのように豊年祭の神様の装具になるという、重要なやくわりを持ちます。ビヒカニブルは食べられないそうです。つまり、島の人々にとって、有用性のある植物は、ミーA、ミーBなどと呼び、またはミーをつけずに植物を呼ぶのに対して、近似しているがAやBでない植物に、ビヒをつけます。実際の雌株、雄株と対応することもあります。オヒルギはミーブシキと言って、樹皮が染料になり、漁網を染めるのに使います。薪炭材でもあり、なまでも燃えるたきぎです。一方、メヒルギはビヒブシキと言って、何にも使うことができません。ヤマト(沖縄、奄美地方以外の鹿児島県以北を広くそう呼びます)で、オ(雄)というと大きい、雄々しい、メ(雌)というと小さい、メメシイ、と言った区別で呼ばれるのに対し、ミーブシキ、ビヒブシキのように、正反対になる現象すら見られるのです。

大野さんは、この雌が雄にまさるという対立概念について、八重山島民のいかなる世界観に立脚するかということを考察して、女性が男性より靈的に優位だ、というヲナリ神信仰が背景にあるのではないかと、その修士論文で論じたそうです。小浜島の豊年祭、石垣島宮良、西表

島古見のそれにあつては、ナガバカニクサ（シツカザ、シツカンザ）を身にまとうのに対して、新城島にはその植物がすくない、ということでしょう。代用ということかもしれません。カニクサ属の蔓性植物は、東南アジアでさまざまな儀礼に使われること、たとえばイリオモテシャミセンヅルは、マレーシアで新築儀礼や稲作儀礼に使われることなど、興味のつきないおはなしを、ずっと聞かせてもらいました。八重山のカニクサ属植物を利用する儀礼が、東南アジア起源だと、短絡させることは危険であるものの、今後の研究に示唆をあたえることだろう、ということでした。

新城島はまさに、地理的にも、精神的にも切り捨てられてきたみたいなの、離島です。そういう島だったからこそ、島の人々は、豊年祭にいのちをかけるとも言ひ、この祭りに向かう結集力は、すさまじいと言うほかありません。アカマター・タロマターの祭祀集団のおきてはたいへんきびしく、そのおきてを破った場合は、村人であろうと、ゆるされないことで、まして部外者たるわれわれが犯すようなことをしたならば、どんな目に遭うか。われわれ見物人は、祭りの当日、カメラも、録音も、そして筆記すら絶対にゆるされない。そういった豊年祭の祭儀に際して、いやというほどそのきびしさ、おそろしさを聞いてきたので、新城島に渡った当初は、異常なくらいの緊張に、からだがかわばったほです。

豊年祭の当日になると、二世帯しかないひつ

そりした島が、四、五百人にふくれあがります。かつてはここに住み、いろいろな思いをのこして、この島を離れたひとたちが、夢にまで見て一年間待ちつづけた豊年祭を迎えるのですから、人々のどよめきは大地をとどろかすとさえ思えます。島に上がると、御嶽（うたぎ）と呼ばれる、信仰の中心になっていて、神事をおこなうたいへん重要なところがありました。新城島上地では、美御嶽とよばれるウタキに、一同があつまります。広場になっていて、その右上の方向に、まっ赤な太陽と、月とのえがかれた白いアーチ形の門があり、奥はツカサ以外、はいることができません。その右横は、こんもりした雑木林になっています。我々の位置からは、なかの様子をうかがえないし、また絶対に近づいてはなりません。ナビンドーと呼ばれる霊地で、アカマター・クロマターが誕生する場所だからです。そこには、アカマター・クロマター祭儀団体の一部、ヤマシンカと呼ばれる村人たちが、夜も寝ずに忌みこもって守っています。ゆったりした調子でうたい、あわせて太鼓の音が聞こえてきて、われわれはわけがわからぬまま、ただそわそわして落ちつきません。

やがて夕方六時ごろになると、ナビンドーから聞こえる歌声も太鼓も、一段と高まってきます。境内の周辺は、若者たちによって厳重な警戒線がしかれ、我々の不安と緊張とはより激しくなってきます。突然、ナビンドーの入口から、ずっとアカマターの子が出現します。両手に細い棒を持ち、体をゆすりながら足踏みをする。

そのうちさっと身をひるがえして、ナビンドーのなかに消える。そして今度はクロマターの子があらわれる。それを何度もくりかえす。やがて、区長さんからの挨拶のあと、村人が声を張りあげ、行事における注意をし、さいごに《われわれ新城民族はいまここに生きています》と叫びます。村人のことばが、強烈に突きささってきました。

太陽が沈み、七時半ごろになると、ナビンドーから、右手に丸棒を持った二人の少年、そして豊年祈と書いた旗持ちが出たあと、びっくりするほどの人数のアカマター(赤鉢巻)、クロマター(白鉢巻)の男たちが、どっと出てくる。さきに出ていた子神は体をゆすり、男たちは手をうちながら体でリズムをとり、声高く《大徳世持ちわーり》の句をうたいあげます。親神の出現を待ち望む集団の歌声が一段と高まります。

親神がいよいよ出現します。歓喜する村人の興奮は、島全体にひびき、夜空の星も神と村人との心の交歓をたたえるかのようにかがやきます。それはまさに、神と自然とひととが調和してかもしだす、みごとな世界でした。

広場での神出現の行事は、巻踊りで終わります。このあと、いまは廃家になったところもふくめて、一軒一軒、神と村人とが、うたいながら歩きまわる。この祭りでうたわれる歌詞は、数十種類からなりたちます。午前三時を過ぎ、全部の家をまわり終わると、神との別れの歌をうたいます。その歌意は、別れたくもない、しかしもう船出をしなければならぬ、という内

容で、神様への思いと、来年の豊作を祈る願いが、しみじみとうたわれます。なかには、《鳴く鶏がうらめしい。明けゆく夜がうらめしい。今夜一夜かぎりの逢瀬だが、しかたがない》といった歌詞もあります。神様との別れの道には、松明が焚かれ、仮面が火に浮かびあがります。そして旗持ちと神様とが、前進後退をくりかえし、群衆も別れ歌を絶叫する。いまや、親子四押が勢ぞろいし、群衆の歓喜は絶頂に達し、ある村人は涙さえ浮かべています。神とひととの惜別の情が激しく揺れて、その感情の交流は、この世のものと思えぬほどに美しく、すばらしい。

やがて神の姿は消えてゆき、島はうそのように静まって、人々は来年の豊年祭をたのしみに、島を去ります。とてもさわやかな、すばらしい朝でした。この新城島の豊年祭をとおしての、精神文化とでもいうのか、心のあらわれかたが、今後の私の課題になるでしょう。島のみなさま、そしてお会いできた方々、ありがとうございます。植物民族学の、興味深いおはなしをたくさんしてくださった大野久差さんには、とても感謝しています。ありがとうございます！」

(琉読会での報告)

(久差)「八重山にはじつにたくさん、方言が存在してて、一つ一つの部落が、その部落固有の方言を持っている、といってもけっして言い過ぎじゃない。部落がちがえば方言名がちがうこともまれではない。ぼくがはじめて八重山で調査をおこなったときのこと。四箇(石垣島の中

心地、石垣・登野城・新川・大川の四字から成る)の10キロメートル東にある、白保という部落で、ある老女にギンネム(*Leucaena leucocephala* de Wit)の方言名を尋ねたんです。老女が答えて、《シトココ》。シトココねえ。ギンネムは熱帯アメリカ原産の植物で、沖縄では緑肥として植栽され、いまでは山野に野生化して、いたるところに見られる。ところが、このギンネムが、白保の5キロメートル西にある部落、大浜では、老人の答え、《ネムリキー》で、さらに、3キロメートル西の平得という部落では、老女によると、《マミキー》と呼ばれているのですって。大浜では村の婦人にギンネムを見せた。白保ではシトココというそうですよ、と言って。そうしたら、婦人は笑いながら、《シトココ》と、じょうずに鳩の鳴き声の真似をした。シトココは鳩の鳴き声なんだって。ギンネムは、夜、小葉を閉じるから、大浜ではネムリキー(眠り木)とも呼ばれ、10ミリ以上の莢果に20個ほどの種子がはいっているの、平得ではマミキー(豆木)と名づけられたというわけ。

黒島の一老女から、ハンナーリイ(雷)が鳴ると《ゴーナキヌザーラド、キダヌザーラド》と言って、桑ノ木の下に隠れたものだということを聞いた。《桑ノ木の下よ、クロキ(*Diospyros ferrea* var. *buxifolia* Bakh.)の下よ》という意味だという。また、石垣島の川平や、鳩間島でも同趣のはなしを聞くことができた。雷が鳴ったら桑ノ木の下に隠れば安全だと、小さいころ、

言われたのですって。むかし、雷が桑ノ木に落ちたとき、枝にはさまって死んでしまい、それ以来、桑ノ木には落雷しないから。

ここらへんが、ちょっとむずかしい問題もある。ぼくらは八重山方言に通じてないのだから、語源を穿鑿することはいたずらに混乱をもたらすだけです。したがって、島民が植物界をどのように分類し、どのような呼称をあたえるか、というところを主に見てゆく。島民の植物知識を、できるかぎり記録する。その自然観を再構築する、というのが試みであり、努めであるわけ。植物民族学というのは、最初(1895年のことだという)、植物遺体の研究が目的だった。人間と植物とのかかわりに重心を置いていったのが20世紀で、ぼくらはあくまで《生活のなかでの植物》というように把握してゆきたいのです。」

(ふたたびNのノート)

(N)「ふと久差の、久高島のアンケート用紙に記した文を思い浮かべると、一年の間にすこし変化があることを認める。それはさきにもふれた、自分を《一旅行者》としてみる視点にかかわる。これは久差が八重山には行きつけているが、久高島ははじめてであることによるかもしれない。しかしそうともいえないのは、お世話になった西銘老と親しくなり、また訪れることをわたしに話していた事実による。もちろんただたんに親しくなったのではなく、特に同宿した人たちが去っていったあと、老とわれわれ二人の二日間、久差とわたしとは、もはや祭そっ

ちのけで、老の昔話を聞きつづけたのだった。それは島人の生活から、航海術のこと、そして老の半生など、気の向くままにつづいた。久差は沖縄の人びとを情の次元で判断するのを止めようとしていたようにみえる。久高島へ渡る前夜、那覇の飲み屋で、久差はめずらしくわたしに突っかかりようとしてきたことがあった。それは沖縄に対する認識の問題だった。わたしが《沖縄をよいと思ったりはしない、ただ冷たく自分を凝視する方法として接するのだ》という、久差は反撥した。しかしホテルに帰り、ふたたび学問についてはなしはじめたとき、久差はひどくしんみりしていた。久差自身が、沖縄の人びとから、心のどこかでわれわれを日本人（ヤマトンチュ）として見ている、と意識させられるとき。そんなときに《ヤマトンチュ》たちが一様に見せる、あのしんみりとした顔。

久差はたしかに新たな次元に踏みだそうとしていた。自己の思想を形成しようとしていた。そして植物民族学という学問をうち立てるべく、努力しだしていた。それゆえ、久高島で出会ったあの少数民族研究者の発言をゆるせなかった。

わたしは久差を批判してきたようにみえるかもしれない。実際、批判もした。久差の批判精神が感性的な次元にとどまって、厳しく思想を形成するにはいたっていなかったと。しかしそれは久差の可能性の問題としてあったことだ。久差の仕事はまだすくない。しかし新城島の植物についての調査は貴重で、学問的価値も高いというはなしだ。それだけではなかった。久差

のしごとが純粹に植物学的なものではなく、植物と民俗、つまり植物が生活のなかにどのようなあらわれているか、そこから、かれらの世界観がみてとれるのではないか、という問いかけが、久差のしごとの情熱を形成していた。久差はまず土地の人びとの生活をみることから始める。それをささえるのは久差の人間に対するあたたかい目だ。

このように見てゆくことにはいったいなんの意味があるのか。わたしは久差への弔辞として、つぎのように述べた。久差はやさしかった。そのやさしさゆえに、現代日本のかかえている矛盾が、集約されてあらわれ、その怨みを歴史的にヤマト（＝日本）として対象化せざるをえない、オキナワの苦悶が、久差のやさしさゆえに久差そのひとにおそいかかったのだ、と。そうなのだ。政治的にと同時に、学問的にいまオキナワは侵略されつつある。どこかの村落のひとつの祭りを調査しただけで、一本の論文ができあがり、学問の業績となる。まだまだ調査されていないものは多く、しかもオキナワは近代の裏がわに前近代を色濃くのこしている。いや裏がわとはいえないほどだ。いわば民俗の宝庫みたいにいわれ、そして学問的に荒されている。調査者たちは現在のオキナワで生活する人びとをみるわけではない。かれらはほとんど亡びゆくオキナワをみるだけだ。それがよいもの、人間的なこととして、土地の人びとも語られる。それはそれでよいとしよう。だがそうでない状況があらわれていることをどうみればよいのだ。

われわれには失われてしまったものをオキナワに見いだし、哀惜したからといって、どうなるというのだ。土地の人びとにとって現実に生活はうごいてゆく。たしかに学問は客観的にさまざまな思いを殺したうえに成り立つ面を持つ。その意味で、オキナワの調査報告は、多くのことをわれわれに教えてくれる。だがしかし、それでよいのか。オキナワの人びとが苦悶しつつ生きていき、そしてわれわれもまた、どうにも突破できない苛ら立ちのなかに悶々としているということはどういうことなのか。もちろんこれらを直接に繋げられることではない。研究者の個人的思いとしてむしろ表面には出してならないことだ。これらを繋げるものは透徹した思想と方法とである。われわれがいかにして強固な思想を打ち立てられるかがつねに課題としてある。」

(Sのノート)

(S)「君(一久差)とさいごに会ったのは、イザイホーもすっきり終わった20日の夜だ。N君があすは東京へ発ち、君ひとり、はじめての奄美へ向かうというので、パピリオンで、海勢頭豊さんに、わざわざ君のため、《さとうきびの花》をうたってもらったのだ。その一週間ののち、何もかも唐突に、不意のできごとだった。Fが、君の遺影をにらみながら、《おれたちの「南島研究」は、これからどうなっちゃうんだ、どうすりゃよいんだよ》と、つぶやいていた。

四半世紀におよぶ《異民族支配》のもとで、沖縄は、祖国を、国家を、民族を、さまざまに

幻想してきた。だが、あたえられた《復帰》のなかで、国家が国家権力にほかならなかったことを思い知らされ、沖縄は、ふたたび沖縄の主体性を、アイデンティティを、と模索しはじめたかのようである。

自衛隊はすぐさま本土なみに配備され、交通方法も本土ふうに変更させられたが、米軍基地はすこしも本土なみにならなかった。子を見捨てた父、あるいは母なる祖国との再会は、継子のような自己の追認をいっただけであった。同一民族への夢、日本国憲法への幻想は、むざんに醒まさせられた。

そのとき、沖縄にのこされていたもの、沖縄が見いだしたことはなんであったか。二冊の書物に刻まれている『醜い日本人』と『沖縄のこころ』ということばは、たぶん、沖縄の民衆の復帰前後の心情をよく汲みあげているのにちがいない。だが、醜いのは、日本人、日本の人民であるのか。につぼんの国家権力の機構と、それをささえる日本人の心性をこそ、あばき撃つべきだったのではないか。反戦、平和の論理を生きているのは、ひとり沖縄の《こころ》のみ、あるいはヒロシマ、ナガサキのひとびとだけであるか。

ウチナー対ヤマトウという図式が、ふたたび不用意によみがえっているのではないか。文化的なレベルとしてなら、ヤマトウ対ウチナーという視点は、いまなお有効であるだろう。だが、ヤマトウとウチナーとの、ことなった風土と歴史との生みだした、ふたつの文化を対話

させ、その関係を生きようとするのでなければ、また一途にウチナーの心のなかに閉じこもって、ヤマトウを撃つというのであっては、むなしすぎる。

沖縄を鎖国せしめ、方言や舞踊などの沖縄文化(財)を防衛する守勢にまわっていたのでは、ほんとうの敵を見さだめることも、島を生きる沖縄の、生きざまとしての文化を新たに見いだしていくことも、ともに不可能だ。地方の時代とか地域主義とかというようなことばに、無防備のままでとびついていったところで、沖縄のかかえる困難な諸問題は、すこしも解決されないであろう。

沖縄のなかに、沖縄を批評する視座の誕生することが、まずもって要請されているわけだが、批評が成立するためには、対象との距離のあることが不可欠だ。沖縄から、みずからをはぎとり、沖縄を、他者のようにながめること、あるいは、みずからの沖縄のうちへ、他者を、異物のように挿入すること。

生きるとは、関係を生きることだ。考えるとは、関係を比較し、測定することだ。主体性が確立されるのは、対象(目的語)へと架橋してゆく動詞(生きる)によって、主語(われ)をささえたいという悲願のなかでなのだ。他者との、異文化との、関係を生きようとする、その危うい緊張感のなかで、そのたくましい意志の前面に、はじめて、自己の同一性の問題がたちあらわれてくるのであって、安定と自足とのみを求めて、他者との差異性に鋭敏でない精神に

とっては、すでにアイデンティティの危機は回避されてしまっているのだから、批評もまた発生しえない。

批評とは、危機に根ざした、だが危機を求めてやまない、精神の道行なのだ。」

(Fによるまとめ)

「10月21日、国学館大学へ行くと、イザイホーの記録映画の会で、大野久差に会えた。Nもいた。西表君、大城君が来ていた。10月28日、法政大学の沖縄文化研究所で、中村所長の《雨乞い》についての発表を聴いた。比嘉さん、波照間さん、そして西表君にまた会った。

11月2日、詩人の黒田喜夫さんから電話がはいって、どうしても貸してほしい沖縄のうたのレコードがある、ということだった。来週には黒田さんのところへ行くことにしよう。10日は琉読会で、増井君が来た。24日も琉読会で、やはりそこでも、私はイザイホーへ行けない、ということを経験で述べた。なんだか、なさけないことを言っている自分が、きたならしく感じられる。12月にはいり、沖縄にいるSに、私の不調を訴えたと、電話口で熱心に症状を尋いてくれ、来年になったら沖縄の巫女(ユタ)にぜひ会わせようと言う。だから、今回は、無理をしてイザイホーへ来なくてもよい、ということになった。Sは私を患者にしたててみたいらしい。それはよいのだが、13年に一度、ことしがおわりになるかもしれない。本土から押しかけてゆくという負い目があるにしても、あまりかたぐるしく考えないほうがよい、とい

うのが大方の意見だった。私は《フィールド》へ行かないだろう、とふと思った。アカマター・クロマター神に、私は今後も、『南島歌謡大成』のなかでしか会うことがないだろう。古代研究会にも、物語探求会にも、まったく出席する精神的余裕がなくなった。寺小屋教室は『源氏物語』をはじめて2年目で、その忘年会を16日にやることになった。いまごろは久高島で、イザイホーのクライマックスだろうと思われた。Nたちはその後も久高島にしばらく滞在して、聞き書きをずっと言っていた。久差は久高島から奄美へわたって、西海岸を調査したいと言っていた。サクラランだったかどうか、確言できない。シダ類は今後、調査されなければならない、故・K教授から託されている、だいじな項目だった。そのシダ類への関心だったか、どうか。

24日の夜11時、Nから、「久差が帰ってこない。」という電話がはいった。名瀬市のTさん、そしてYさんからの、電報があったという。23日の夕方、10メートルの崖から落ちて、頭部、胸、足などを打ち、それからなお数時間、生存していたようで、最後の推定時刻は午前3時。砂浜を100メートル以上、はいまわったすえの、失血だったという。Nが25日の朝早く、様子をつかめぬまま、両親をつれて加計呂麻島へ向かう。遺体の発見されたのはその日の午前11時過ぎだったという。私は以前からの約束があって、京都へむかい、『源氏物語』明石の巻についての研究発表をした。Sは何も知ら

ずに、24日、那覇を発ち、25日の京都での古代文学研究会で、私と合流した。26日になっても私たち、私とSとは、くわしいことをつかめないでいた。ようやくNとのあいだの、電話が通じて、事態の進行をすべて知らされたのは、その日のおそくなってからだった。27日に、東京でも《語りに関するシンポジウム》があつて、それを急いで終え、千石の久差宅へ、一緒に上京したSとともに向かった。笑顔の遺影に対すると、Sの目から、なみだがあふれこぼれた。Nは『文学史研究』に「古代詩論の方法 試論」を連載しながら、沖縄における神話と歌謡との関連について傾斜しつつあった。私は神歌を中軸に据えた「古日本文学発生論」の連載を終え、一冊にまとめたばかりだ。久差は林学、地理学をふたつの学部で卒業したあと、大学院にすすんで、植物と祭祀との関係、民俗のなかでの植物を調査して、あらたな学問領域をきりひらこうとしていた。そしてSは琉球大学に着任して4年目の、私たちにとってかなめの存在だ。こんなかたちで一堂に会することになろうとは。花輪を琉読会の名でおくる。

3年後、私ははじめて加計呂麻島にわたることができ、海上から、久差の終焉の地に近づいていった。あんな蘇鉄の崖から、サクラランをとろうとしたのだろうか。浜辺を見やると、白い、建てられた棒状の板片があり、遠くからでも「世界人類が平和でありますように」と書かれてあると見える。世界に、中国大陸の奥地でも、ヒマラヤ山脈の高いところでも、見るこ

のできる、宗教団体がずっと建ててまわっている、あの「世界人類が平和でありますように」を、久差は自分の終焉の地に建てた。久差のお父さんから聞くところによると、久差にはガールフレンドらしいガールフレンドがいなかった。私は、そこで、この《小説》のなかを利用して、一《女子学生》を新城島でかれに会わせ、それから、久差の、沖縄へ寄せる心やさしい思いをいささかでも記念するために、その輪連間原（われんまばる）の浜辺に、平和希求という棒片を建てることにした。」

（完）

（おことわり）

この「「世界人類が平和でありますように」 2」は《小説》（『クアドランテ』版）です。『沖縄の植物と民俗（玉置和夫遺稿集）』（1979・12）、とりわけそのなかの古橋信孝執筆のあとがき、「心のかおりを求めて—新城島の豊年祭」（橋本佳世子、『寺小屋雑誌』7、1978・11）、および関根賢司「奄美ふたたび」『異化への試み』（『赤と青のフォークロア』所収、1981）を利用させていただきました。橋本氏の、豊年祭の記録は1977年8月5日のものと思われます。その年、玉置和夫は小浜島の豊年祭などを見学した模様で、かれが新城島のそれを見学するのは1978年になってからのようです。うえの小説ではその1978年に《女子学生》と大野久差（玉置和夫）とが出会ったように虚構化されてあります。なお「「世界人類が平和でありますように」 1」は『三田文学』56（19

99年冬季号）に掲載しました。

（ふじい さだかず・東京大学言語情報科学専攻）